

今日のシライ中

本の翼

白井中学校図書室から V01.35

例年冬休み明け、国語の最初の授業は、「お正月恒例 百人一首かるた」で幕開けとなるのですが、今年度に限っては、残念ながら見送らざるを得ません。また状況が許すようになったら、お友達や、ご家族で「百人一首かるた」を楽しんでください。それでは、気分だけでも、「お正月」。「百人一首」の紹介をいたしましょう！

『百人一首辞典』 神作 光一 監修

1年生にもわかってもらえるよう、まんがで、わかりやすく解説した本です。(各教室に1冊ずつ置いてあります。)
「百人一首」とは…の基礎知識から、「百人一首かるた」のルールや、上手な取り方まで、教えてくれています。もちろん、全ての歌の読み方、意味、歌にまつわるエピソードが、見開き2ページにイラストと一緒に書かれています。その意味を見れば、「ああ、昔の人も、今の私たちと同じことに一喜一憂していたのね…」と思うことでしょう。意味が分かったら、ぜひ、音読してみてください。それでは、いくつか紹介します。



しら露に 風の吹きしく 秋野のは つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける 文屋 朝康
 (しきりに風が吹きつける秋の野は、さながら真珠の玉が辺り一面に乱れ散るようだ。)

いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひけるかな 伊勢 大輔
 (昔の奈良の都で咲いた八重桜が、今日宮中で色美しく咲き誇っていることですよ。)

ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは 在原 業平
 (神代の時代でも、竜田川を紅葉が真っ赤な色に絞り染めるなど聞いたことがない。)

ゆふされば 門田の稲葉 おとづれて 蘆のまろやに 秋風ぞ吹く 大納言 経信
 (夕方、稲の穂に秋風が訪れる。その秋風が粗末な蘆ぶきのこの家にも寂しく吹く。)

うらみわび ほさぬ袖だに あるものを 恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ 相模
 (涙で乾く間もない袖ですら朽ちぬのに、この恋のため朽ちてしまう我が名が惜しい。)

かぜをいたみ 岩うつ波の おのれのみ くだけてものを 思ふころかな 源 重之
 (風に碎ける波のように、私ばかりが心も砕けんばかりに恋に思い悩んでいるこの頃。)

つくばねの 峰より落つる 男女川 恋ぞつもりて 淵となりぬる 陽成院
 (みなりの川の深い淵のように、私の恋心も積もり積もって深い深い思いの淵となった。)

これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関 蝉丸
 (これがまあ、知る人も知らない人も別れてはまたここで逢うという逢坂の関所だな。)

うかりける 人を初瀬の 山おろしよ はげしかれとは 祈らぬものを 源 俊頼
 (振り向いて、と祈ったのに。あの人の心がさらに冷たくなれとは祈らなかつたのに。)

寿ぎ(ことほぎ)の詞(ことば)にかえて。